

日本骨髄バンクの現状（平成 17 年 11 月末現在）

	10 月	11 月	現在数	累計数
ドナー登録者数	6,873	5,225	229,142	291,458
患者登録者数	230	181	3,140	19,541
骨髄移植例数	98	64	-	6,947

注）数値は速報値のため訂正されることがあります。

20 歳未満のドナー登録者数
11 月 226 人
合計 1,702 人（17 年 3 月～）
51 歳以上のドナー登録者数
11 月新規 212 人
延長 153 人
合計 1,319 人（17 年 9 月～）

1 ドナー登録者の増加傾向が続き、11 月も「過去第 2 位」に

11 月の月間ドナー登録者数は 5,225 人でした。10 月に比べると 1,600 人余りの減少ですが、この数字は「過去第 2 位」であり、現在数 23 万人まで「あと 858 人」にまで迫りました。累計では、29 万人を突破しました。前年同時期（1 月～11 月）の比較では、平成 16 年の 26,829 人に対して平成 17 年は 35,127 人（約 1.3 倍の 8,298 人増）となっています。また、骨髄移植実施例は平成 16 年の 729 例に対して、845 例と 116 例の大幅増です。

2 日本骨髄バンクでの非血縁者間骨髄移植が 7,000 例を達成

平成 5 年 1 月の初移植以来、症例数を重ねてきましたが、今月 15 日に累計 7,000 例を達成しました。6,000 例が昨年 11 月でしたから、およそ 1 年 1 カ月間に 1,000 例というスピードで達成したことになります。ドナーの皆さまをはじめ医療機関の関係者など皆さまのご協力・ご尽力の賜物です。日本骨髄バンクを介した移植成績は、血縁者間移植とほぼ同等であり、欧米と比較してもよい成績を示しているため国際的にも高く評価されています。

一人でも多くの患者さんを救命できるよう、当財団をはじめ関係者一同、今後も引きつづき事業推進に邁進してまいります。

3 「日本骨髄バンクニュース」第 27 号を発行

「日本骨髄バンクニュース第 27 号」を 12 月 5 日、発行いたしました。今号は、登録年齢が「18 歳以上」となったことを受け、神奈川県立横浜立野高校で「総合学習」の一環として骨髄バンクを取り上げ、夏休み中に実施した講義、財団事務局見学、登録呼び掛けの現地研修の様子を特集として取り上げました。9 月から「54 歳まで」に引き上げられたことから、20 歳未満と 50 歳以上のドナー登録者各 4 人のメッセージも掲載しました。

また、ドナー休暇制度の現状に触れ、基本的な事柄や導入企業の特徴などを特集しました。登録から提供後の健康診断まで、通常は計 10 日ほどの休暇が必要です。ドナー休暇制度は、ドナー登録者増の一助ともなるため、多くの企業・団体での導入が期待されます。

さらに、ドナー登録内容の変更が、12 月からインターネット経由でも可能になったことから、その方法についても「Topics」で取り上げました。

訂正 「バンクニュース第 27 号」10 ページの東京モーターショーでの登録者数を 887 人と表記しましたが、これは登録受け付け者数で、実際の登録者数は「マンスリー11月号」のとおり 852 人でした。関係者の皆様にご迷惑をおかけしました。お詫びして訂正いたします。

4 「Gift of Life」を改訂しました

ドナー登録要件の変更に伴い、改訂版が待たれていた「Gift of Life」が装いも新たに発行されました。「見やすく、読みやすく、扱いやすい」ことを改訂のポイントに、判型をA4 三つ折りから B5 三つ折りに縮小して、配布・携帯の利便性を考慮しました。また、文字を大きくするとともに、内容も簡潔にしました。

内容については、「チャンス」ほど詳しく説明してありませんが、ドナー登録や骨髄提供、骨髄移植などについて「必要最小限」の情報を掲載しており、財団の印刷物として初めてQRコード（2次元バーコード）を導入しました。QRコードとは、携帯電話のカメラ機構によって問い合わせ先へのアクセスを簡易化したものです。

手軽に利用できることから旧版時代も要望が多かったもので、街頭での配布用にぜひご活用ください。ご希望の節は広報渉外部までご連絡ください。

5 中学生が「主張」で内閣総理大臣賞、小学生が「作文」で最優秀賞

平成 17 年度少年の主張全国大会（社団法人青少年育成国民会議主催）で内閣総理大臣賞に輝いたのは、宮崎県の三股町立三股中学 3 年生・福田聖伍さんです。「少年の主張」は、都道府県大会に 54 万 2000 人も応募があり、ブロック選考で選ばれた 13 人が東京での全国大会で主張を発表しました。福田さんのスピーチタイトルは「命をつなぐアサガオ」で、自身が小学校 3 年生のときに白血病となり、福岡県内の病院で移植を受けました。入院中で最もつらかったのは、ともに病気と闘った仲良しの 3 人を失ったことだそうです。

そのため、いのちを粗末にする人のニュースを聞くたびに「生み育ててくれた親、必死に病気と闘っている『生きたい!』と願っている人がいることを分かってほしい」と訴えます。この主張は、町で行われている立志式の折に発表したものが原点になっており、最後に新潟の丹後光祐君の闘病と死を描いた「いのちのあさがお」に触れています

一方、「第 1 回未来のお医者さん・看護師さん作文コンクール」（NPO 法人日本サステイナブル・コミュニティ・センター「どこカル.ネット」主催）で最優秀賞に選ばれたのは、那覇市立小学校 1 年の奥間友芽子さんです。

二つ年下の妹が白血病となり、昨年 1 月に神奈川県内の病院で移植を受けた経験を、「みらいのおいしゃさん」と題してまとめています。

「お医者さんになって、血液の研究をすることが夢。遠い病院に行かなくても白血病を治す薬をつくりたい」と将来の夢があふれています。妹も「わたしは看護師さんになりたい」と話しているそうです。

6 財団の会議開催予定

傍聴をご希望の方は、事前に財団事務局総務部までお申し込みください。

	公開・非公開	開催予定
常任理事会	公開	1月13日（金）17:00～19:00 廣瀬ビル2階会議室